

寺院建築における懸魚の起源

佐々木 日嘉里

はじめに

懸魚げぎょとは寺院建築の屋根に取り付けられている部材であり、建物側面(妻)の板(破風板)が三角形に合わさった部分から垂れ下がる大きな飾りの板を指す。

懸魚は妻側の三角形部分(破風)を飾る部材として、また「魚を懸ける」という水を連想する言葉により火災から建物を守る「お守り」としての機能も持つ。ただし本来は棟木(むねぎ)(屋根の最も高い位置に配される横架材)の木口(木材の切断面)を風雨から保護することにある。

懸魚には種々の意匠があり、大きく四種類に分類できる。三花懸魚みつばな、鎗懸魚かぶら、猪目懸魚いのめ、梅鉢懸魚うめはちであり、これらが現在の寺院建築に見られる懸魚の形式である。

本稿において、これら四種の時代的变化を確認し、それらの存在の有無を時代を遡りながら探ることを目的とする。

さらに、寺院建築は飛鳥時代、仏教導入と共に日本が取り入れた建築であり、その構法、技術は中国大陸の影響を多大に受けている。そのため懸魚は中国建築の影響によって受け入れたものか、あるいは、竪穴式や高床式の建物などに既に用いられていたものを仏教建築に取入れたものかを確認する。

一 中世における三花懸魚、鎚懸魚の存在

まず三花懸魚、鎚懸魚の二種であるが、これらは本来中国の建築様式で用いられていた意匠である。北宋時代の建築技術を編纂した『营造法式』に描かれている懸魚の意匠と三花懸魚がほぼ同じであることから確認できる¹⁾。鎌倉時代、禅宗の受容と共に当時の中国建築様式も取り入れたことから、三花懸魚、鎚懸魚もそのころに伝来したものと推察される。

日本では鎌倉時代前期、建仁寺を嚆矢として禅宗寺院が建立されたが、禅宗寺院において中国の建築様式を忠実に取り入れたのは建長寺から、と考えられている²⁾。建長寺は建長五年(一二五三)、南宋の渡来僧である蘭溪道隆を開山として、中国の径山万寿寺を模した宋風の寺院として造営された。元弘元年(二二二二)の「建長寺伽藍指図」³⁾からは、当時の伽藍配置が南宋の五山様式を踏襲していることが読み取れる⁴⁾。南北朝期に五山十刹の制が定着すると、建長寺の様式は禅宗寺院建築の規範となり、その様式は全国に広まり禅宗寺院の基本要素となった。

建長寺の建築様式が中国建築を踏襲しているとすれば、懸魚の形式は三花懸魚、鎚懸魚と推察できるのだが、指図(配置図・平面図)からは立体的な建築様式は判然としない。建長寺建立当時の遺構はなく、当時の懸魚を確定することは困難である。

また、鎌倉時代建立の遺構も三例のみで、そのうち懸魚が用いられているのは、山口県下関市に建つ功山寺仏殿ただ一例である。功山寺仏殿は現存最古の鎌倉時代後期建立の禅宗様寺院であるが、三花懸魚ではなく猪目懸魚が使われており、しかも大正時代に屋根、妻部分の大規模な修理が行われているため建立当時の懸魚の形式は不明である。

建長寺には絵図「往古仏殿図」⁵⁾が残されており立体的な仏殿の姿を知ることができる。一種の姿図

(立面図)のような絵図には禅宗様の特徴を表した仏殿の入母屋造の破風に三花懸魚が描かれている。しかし、この図に関する詳細な情報は殆どなく、図中の貼紙に、宝暦五年(一七五五)に修復された、との記載と、現在の仏殿が正保四年(一六四七)に移築される以前に描かれたものであることの二点以外に制作時期を絞ることはできず、図中の仏殿の年代に関し明確には断定できない。

鎌倉中期及び末期の史料に神社建築造営のための部材として「懸魚」が記されていることから⁶⁾、この時代に懸魚が用いられていたことは確実であるが、神社建築であるなら、中国輸入の三花懸魚ではなく、恐らく梅鉢懸魚か猪目懸魚であったであろう。

したがって、鎌倉時代の懸魚の様式に関して、三花懸魚、鏑懸魚が用いられていた、とする確証を得ることはできなかった。

室町時代建立の禅宗様建築の遺構には、正福寺地藏堂(一四〇七年 東京都東村山市)、安国寺経蔵(一四〇八年 岐阜県高山市)、清白寺仏殿(二四一五年 山梨県山梨市)などがある。正福寺地藏堂、清白寺仏殿には鏑懸魚が、安国寺経蔵には三花懸魚が用いられており、禅宗様の建築様式が地方にまで定着していたことが確認できる。これらの寺院建築は墨書などから建立年は確定しているが、懸魚の取り付け時期は不明である。一方建立年の確定はできないが、明らかに古い形式の懸魚を持つものに、永保寺開山堂祠堂(岐阜県多治見市)がある。平成期解体修理に伴う年輪年代法による調査研究の結果、この堂の建立時期は寺伝よりも古く南北朝初期であったことが判明した。修理報告書によれば、祠堂の三花懸魚は明治期の解体復元修理に際し旧材をそのまま用いており、風化の状況から見ても古い年代のものと判断されている。

そして建立時期がほぼ確定し、建立当初の懸魚が現存するものとして永保寺観音堂が挙げられる。平成期における解体修理及び調査研究により、この堂は室町中期、一四六〇年頃伐採された材で建立された

建物であり、この堂の三花懸魚は釘痕跡などから建立当初か当初に近いものであると判断された⁽⁷⁾。
以上現段階で、三花懸魚、鎚懸魚が確認できるのは南北朝以降であり、鎌倉時代の存在を明らかにすることはできなかつた。

二 現存最古の懸魚

懸魚の存在を確認するためには、現存する懸魚の作製年代を確定する必要がある。寺院建築の造営時の懸魚が現在まで残存するものであるならば、作製時期の特定も可能であるが、風雨の影響を直接受ける懸魚は傷みが早く交換されやすいため、建立当初のものを求めることは容易ではない。確実に当初の懸魚であることを立証することは非常に困難であり、確定可能な懸魚は類例に乏しいのが現状である。

そうした中で、棟札から鎌倉時代前期のものであることが判明した懸魚が現存する。

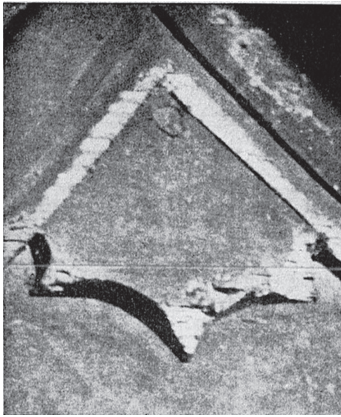


図1 積尊寺観音堂宮殿の梅鉢懸魚

それは、長野県積尊寺観音堂宮殿(厨子)に残る梅鉢懸魚である(図1)⁽⁸⁾。宮殿の棟札には「正嘉二年正月二十日」と記されており、この宮殿の造営年(一二五八年)が確認できる。その部材の一つである懸魚も同時期に作製されたことは明らかである。さらに重要なことは、この宮殿は昭和二十六年(一九五二)に修理復元されるまで、造営時のままであり、図1は天沼俊一博士が修理以前に撮影した映像である、ということである。すなわち、鎌倉時代前期、正嘉二年(一二五八)作製の懸魚そのものを確認できたのである。また宮殿(厨子)建築

は細部にわたり当時の建築様式を忠実に表していることから、この梅鉢懸魚の形状は当時の仏教寺院に用いられていた、と考えられる。

このように本堂内部に祀られている宮殿建築は傷みにくく、懸魚がそのままの状態で残る可能性が高い。そこでさらに造営年の古い宮殿建築を調べると、愛知県観福寺本堂内宮殿があり、本体背面の板壁墨書に「宝治年太歳戊申二月」とあることから、宝治二年（一二四八）の造営であることが確認できる。入母屋造柿葺きの破風には、ハート形の猪目が二つ割り抜かれた猪目懸魚が取り付けられている（図2）⁹⁾。この宮殿の破風には修理履歴がないことから、造営当初の形状も確認できたのである。

以上のことから、鎌倉前期における猪目懸魚、梅鉢懸魚の存在、および当時の形状がそれぞれ確定できた。これら梅鉢懸魚、および猪目懸魚より古いものは確認できなかったことから、それぞれが現存する最古の懸魚とみなすことができる。

三 平安時代における懸魚

現存最古の懸魚が鎌倉前期であったことから、それ以前における懸魚の形式に関しては、史料などから判断する以外ない。平安時代の史料群から「懸魚」の語彙を抽出したところ、東大寺、東寺、広隆寺の堂宇で使われていたことが確認できた¹⁰⁾。例えば平安時代前期に作製された「広隆寺資材校替実録帳」には、仁和三年（八八七）における広隆寺の現状が記載されており、「朽損、北九十丈 今校□板所所頽落、

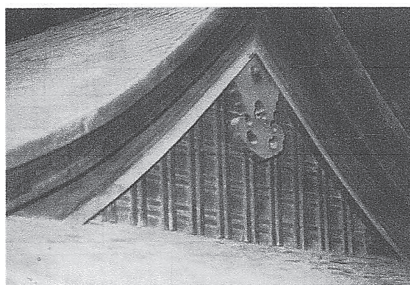


図2 観福寺本堂宮殿の猪目懸魚

於板悉朽損也、「今校上椼皮中破、堤瓦全、懸魚既无、」などから、堂宇にはかつて懸魚があり、それらは記載当時失われていたことが知られる¹¹⁾。

広隆寺は弘仁九年(八一八)全焼して後、承和三年(八三六)以降復興を遂げたが、この史料が記されるまでの約五十年間に建物は大きく損壊し、懸魚も朽ち落ち無くなっていることが分かる。建立当初の懸魚が失われやすい様が理解できる史料である。

この堂宇は椼皮葺五間金堂だが、他の堂宇でも懸魚がなくなっていることが同じ文書に記載されていることから、平安時代初期には懸魚が用いられ、その存在が認識されていたことが読み取れる。

三十一 平安時代の梅鉢懸魚

史料より平安時代に懸魚が使われていたことは確認できたが、その形式は記されていない。そのため当時の懸魚の形式を知る鍵として絵巻物を用いた¹²⁾。その中で平安時代制作の絵巻物九本における懸魚の形式を調査した結果(表1)、『信貴山縁起』『年中行事絵巻(摸本)』『粉河寺縁起』『伴大納言絵詞』『彦火々出見尊絵巻(摸本)』『吉備大臣入唐絵巻』以上六本に懸魚が描き込まれていた。

例えば『信貴山縁起』中、待賢門の梅鉢懸魚は朱色で拝懸魚、降懸魚おろりが描かれているが、その形状は釈尊寺観音堂宮殿の梅鉢懸魚と酷似している¹³⁾。『伴大納言絵詞』に描かれている左大臣邸の梅鉢懸魚も同様である¹⁴⁾。どちらも釈尊寺観音堂宮殿の梅鉢懸魚と殆ど同じ形状で描かれていることは、絵巻物の図の正確さを表し、このことから平安時代末期の寺院建築における梅鉢懸魚の形状を知ることができる。

『年中行事絵巻(摸本)』に描かれた懸魚の殆どが梅鉢懸魚であるが、絵巻の場面は内裏、院御所(法成寺殿)、大内裏、高位の屋敷が占め、小規模な建物であっても懸魚が描かれている¹⁵⁾。しかし庶民の建物には

皆無である。『信貴山縁起』『粉河寺縁起』『伴大納言絵詞』のいずれにも庶民の家に懸魚は描かれておらず、このことから懸魚は社会的地位を示す象徴の役割を担っていたことが理解できる。

(表1) 平安時代制作における絵巻物に描かれた懸魚の種類

絵巻名	制作年代	制作者	懸魚の種類と描かれている数
1. 源氏物語絵巻(隆能源氏)	近衛天皇在位期 (一一四一)～(一一五五)	四制作グループ	無
2. 信貴山縁起	一一六〇年頃	作者不詳	・梅鉢(2) ・猪目風(1…大仏殿回廊)
3. 年中行事絵巻(摸本)	一一六五年前後	常盤源二光長? 作者不詳	・猪目風(3…蒼龍楼、白虎楼、梅宮社本殿)
4. 寢覚物語絵巻	一一六〇～一一八〇	作者不詳	無
5. 粉河寺縁起	一一七六(安元二年)	作者不詳	・梅鉢(1) ・猪目風(0)
6. 伴大納言絵詞	一一七七(治承元年)	常盤源二光長	・梅鉢(2) ・猪目風(2…会昌門、応天門)
7. 彦火々出見尊絵巻(摸本)	一一七〇～一一八〇	常盤源二光長	・梅鉢(2) ・猪目風(3…異界の宮殿、門)
8. 吉備大臣入唐絵巻	一一七〇～一一八〇	常盤源二光長	・梅鉢(0) ・猪目風(10…唐の高楼)
9. 六道絵	一一七〇～一一八〇	作者不詳	無

※『年中行事絵巻(摸本)』は略摸本を含めた数を示した。

三―二 平安時代の猪目懸魚

梅鉢懸魚が鎌倉前期建立の宮殿懸魚の形状と酷似していることに対し、猪目懸魚は異なる形状を持つ。まず猪目の割り抜きを持つものは一例もなく、全体の形状も鎌倉時代前期の観福寺本堂宮殿の猪目懸魚とは異なる(図3)¹⁶⁾。しかし明らかに梅鉢懸魚とは別の形式であるため、ここでは仮に「猪目懸魚風」と称することにする。

表1に示したように、平安時代における絵巻物の中でこの懸魚を持つ建物は、全て寺社及び官衙建築に限られている。例えば『伴大納言絵詞』では、朱雀門、応天門、会昌門など、大内裏の正面に一列に並ぶ二重門の懸魚は「猪目懸魚風」に描かれている¹⁷⁾。内裏、邸宅などの住居建築には例外なく梅鉢懸魚であることから、「猪目懸魚風」は中国伝来の建築の部材、として認識されていたと考えられる。このことがより明確に表れているのが『吉備大臣入唐絵巻』などであり、物語の背景が日本ではなく異界や唐の建物には全て「猪目懸魚風」が描かれている¹⁸⁾。

そのため、中国唐代における壁画から懸魚を調べてみると、盛唐において莫高窟に描かれた寺院の懸魚の形状は猪目のない板状の「猪目懸魚風」であり、日本の懸魚との類似点が認められる¹⁹⁾。平安時代、壁画におけるこの形式の懸魚が中国から伝来し、日本の絵巻に用いられたことは十分考えられることである。

三―三 絵巻に見る猪目懸魚の変容

ここで問題となるのが、絵巻に描かれた「猪目懸魚風」が当時の建築物の懸魚の形状と同様であったのか、という点である。『信貴山縁起』、『伴大納言絵詞』、それぞれ異なる絵師により描かれた「猪目懸魚風」の形状が、互によく似ており、また、どちらも建築の構造を正確に写し取って描いている点からみ

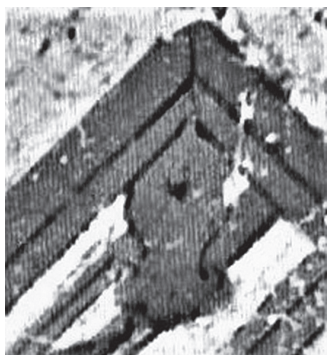


図3 平安末期「猪目懸魚風」懸魚



図4 鎌倉初期「猪目懸魚風」懸魚

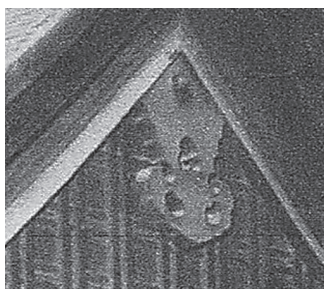


図5 観福寺本堂宮殿猪目懸魚

れば、懸魚も想像ではなく写實的に描かれたものと考えることができよう。早急に結論付けることはできないが、そうであればこの形状を平安末期の猪目懸魚とみなすことも可能である。そして鎌倉時代には観福寺本堂宮殿に見られるような猪目懸魚へと変化を遂げた、と推察できる。

この推察を裏付ける史料として鎌倉時代初期に作成された『北野天神縁起(承久本)』が挙げられる。

承久年間(一二二九～一二三二)に描かれた朱雀院正門、渡殿、それぞれの破風に掛かる懸魚の外観は観福寺本堂宮殿と同様の猪目懸魚であり、内部には中央に猪目が一つ割り抜かれたように描かれている²⁰⁾。この懸魚と同じ形式のものが、永仁六年(一二九八)唐招提寺に施入された『東征伝絵巻』にも描かれ、さらに延慶二年(一三〇九)春日社に施入された『春日権現験記絵』にも、春日社本殿はじめ、宝殿、楼門、興福寺鐘楼などの破風に猪目が一つ記された猪目形式の懸魚が描かれている²¹⁾。

ここで筆者が推定したことは、平安時代の猪目懸魚は外観のみが「猪目懸魚風」で猪目はなく(図3)、

鎌倉時代初期には内部に猪目一つの割り抜きを持つ形式が確立し(図4)²³⁾、この過程を経て、その後猪目を二つ持つ猪目懸魚(図5)へと変容を遂げる、ということであった。

そこで、これまでに言及してきた絵巻物²⁴⁾から、推定通りの変化が見出せるか確認するために、作製年代が平安時代以降で、「猪目懸魚風」およびそれに類する懸魚を抽出し、描かれている場所、形状を調査した。特に猪目の穴の存在、穴の数などに注目し作製年代順にまとめたものが(表2)である。

懸魚の形式と作製年代の関連性を検証した結果、鎌倉時代十三世紀初頭から十四世紀初頭にかけてのおよそ一世紀の間は図4のような猪目形の割り抜きを一つ持つ懸魚が高い頻度で描かれていた。ところが、その後の時代になっても図5のような懸魚は現れず、外観は図4で、猪目のないものが続き、十六世紀中ごろには、外観は図5のように端正な形状で、しかし猪目は描かれない、という結果になった。なお今回の調査資料以外の絵巻でも調査したが懸魚に猪目は描かれていなかった²⁵⁾。

しかし実際の建築物では宝治二年(二四八)に作製された図5の観福寺本堂宮殿猪目懸魚には猪目が二つ割り抜かれており、また文永五年(二六八)前後取り付けの当麻寺閼伽棚猪目懸魚も同様の形式である²⁶⁾。

絵巻物に猪目一つの割り抜きが描かれていた同時代、実際の建築物の懸魚には猪目二つの割り抜きがあったことから、実際の建築物の懸魚と絵巻物に描かれた懸魚にはかなりの隔たりが認められた。そうすると鎌倉時代十三世紀初頭から十四世紀初頭にかけての百年間、盛んに描かれた一つのみ猪目形の割り抜きの図をどのように捉えればよいのであろうか。

ここで、上記の問題点を考察するために、絵巻に描かれた特筆すべき特徴をいくつか列挙することにする。「猪目懸魚風」懸魚に猪目が一つ描かれている特徴的な絵図の初出は『北野天神縁起(承久本)』である。この絵巻には、他にも非常に興味深い部材が描かれている。それは複雑な曲線の線形を持つ木鼻で、柱か



図6 鎌倉初期「猪目懸魚風」懸魚

ら突き出した様子が、この場面の主題に見えるほどの巧緻さで描かれている⁸⁵⁾。このような木鼻の図は平安時代の絵巻物には皆無であった。

この絵巻が描かれた時代は、中国南宋から新しい建築様式が流入した時代であり、その新様式を用いて東大寺が建久六年(一一九五)再建された。それ以降新様式は日本の建築に大きな影響を及ぼしてきたが、この絵巻に描かれた木鼻の意匠は新様式の特徴をよく表現している。また外側を複雑に削ったことで、隙間に猪目が浮き出ている(図6)⁸⁶⁾。

さらに、『玄奘三蔵絵』『東征伝絵巻』には南宋建築の強い影響が窺われ、平安時代の建築図と大きく異なる点がいくつも見られる。『玄奘三蔵絵』は十三世紀後半の作品であるが、この時代には、東大寺建立時の新様式である「大仏様^{だいぶつよう}」以外に建長寺建立時のもう一つの新様式である「禅宗様」が出現した頃と重なる。それらの建築様式が絵巻の中に表れているのである。

まず懸魚の形式が「猪目懸魚風」ではなく、禅宗様の形式である「鐫懸魚風」に見え、さらに縦に二重に重なる「二重懸魚」が用いられている。柱の足元には礎盤^{そでばん}が描かれ、柱には粽^{もちもち}が付く。さらに中国宋様式の構造を特徴付ける貫^{ぬき}が描き込まれていることも大きな変化である。さらに部材の先端にまで彫刻が施され全体の印象を華やかに演出している。

『東征伝絵巻』では、禅宗寺院に見られる花頭窓^{かとうまど}が建物前面を飾り、柱からは木鼻が突き出し、その先は線形が付いている。柱の足元には礎盤らしきものも描かれ、粽が付く禅宗様の手法が数多く表れている。この絵巻にも貫が描かれているが、貫が柱を固める構造が南宋の寺院建築と酷似している。また組物

を下支えするための挿肘木さしじきまで描き込まれている。また、屋根側面の妻飾りには、虹梁大瓶束形式という新構造が用いられており、懸魚は「猪目懸魚風」ではなく、「三花懸魚風」に描かれている場面も見られる。この作品の背景は多くが唐を舞台としているため、異国風に描いているが、単なる空想ではなく新様式に対する情報収集とそれに基づく映像化の結果であることを示している。『弘法大師行状絵詞』²⁸にも同様な描写があり、これらは全て平安時代の絵巻には皆無であった建築様式の描写である。

このように鎌倉時代十三世紀初頭から十四世紀初頭にかけて起きた、建築様式の大きな変化には懸魚の形式の変化も含まれていたと考える。新様式において部材に装飾が施されるようになった影響で、すでに日本に定着していた猪目の文様を、懸魚にも用いるようになった、と推察できるのである。

「猪目懸魚風」に表れた猪目ひとつの割り抜きは、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて起きた懸魚の形状の変化を絵師たちがシンボル化したものと考えられる。

建築の新様式が百年間で地方にまで拡大し定着したと同様、「猪目懸魚風猪目」も「猪目懸魚」へと定着した結果、変化を表現するためのシンボルは不用になり、絵巻物から猪目一つの紋様は用いられなくなった、と想定できよう。実際十四世紀末作成の『弘法大師行状絵詞』では懸魚に猪目を描き込むことは殆どなくなっていることから類推できる。

以上平安時代における懸魚の形状についてまとめると、以下のようになる。平安初期から懸魚は官衙建築や寺社建築に用いられ、その形式は、恐らく梅鉢懸魚や「猪目懸魚風」の懸魚であった。梅鉢懸魚は、神社や官衙建築以外に貴族や豪族の邸宅にも用いられ、その形状に殆ど変化はなく、鎌倉時代に引き続き用いられていた。一方、中国の影響と考えられる「猪目懸魚風」懸魚は、猪目懸魚のような形状を持ちながら、内部に猪目の割り抜きのない板状であった。やがて平安末期、中国南宋から新様式が流入したこ

とで、懸魚の形状にも変化が表れ猪目を持つようになった。種々の資料から以上のことが確認できた。

(表2) 平安時代以降の絵巻物に描かれた猪目風懸魚の形状

絵巻名	巻数*	制作年代	描かれている場所	懸魚の形式
1 北野天神縁起	続15	承久年間 (一二九〇—一二)	朱雀門 朱雀院正門 渡殿 清涼殿門	猪目、猪目なし 猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ 猪目、猪目くり型
2 華嚴五十五所絵巻	続7	十三世紀初	祠 十重塔 四足門 新羅山門 新羅 港町役所 至相寺山門	猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし
3 華嚴宗祖師(華嚴縁起)	続8	十三世紀中期	港町 民家 玄奘父邸宅 玄奘止住寺院 大寺院	猪目(くり型多し)、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし
4 玄奘三蔵絵 上	続4	十三世紀後期	クシナガラ寺院 クマール王 王宮 ナーランダ寺院 ナーランダ寺院泉殿	猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし
5 玄奘三蔵絵 中	続5	十三世紀後期	クマール王 王宮 ナーランダ寺院 ナーランダ寺院泉殿	猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし
6 玄奘三蔵絵 下	続6	十三世紀後期	玄奘僧房	猪目、猪目なし 猪目、猪目なし

* 『日本の絵巻』『続日本の絵巻』(小松茂美・中央公論社)

寺院建築における懸魚の起源(佐々木 日嘉里)

7 東征伝絵巻	15 永仁六年(二二九八)	楊州 大雲寺 楊州 大明寺 遣唐船 楊州 大明寺 屋形舟 阿育王寺 国清寺重閣金堂 楊州 大明寺 太守の館 蘆山東林寺 龍泉寺 金堂 楊州 延光寺 龍興寺 大宰府観世音寺門 東大寺南大門 東大寺南大門中門 東大寺戒壇院 唐招提寺門 唐招提寺金堂	猪目(下に長く伸びる)、猪目一つ 猪目(兔の毛通し)、猪目一つ 猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目(下に長く伸びる)、三花風 猪目、猪目一つ 猪目(下に長く伸びる)、三花風 猪目、猪目一つ 猪目(下に長く伸びる)、三花風 猪目(下に長く伸びる)、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目(下に長く伸びる)、猪目なし 猪目(下に長く伸びる)、猪目一つ 猪目(下に長く伸びる)、猪目なし 猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ 猪目風、三花風 猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ 猪目、猪目なし
------------	------------------	---	---

<p>14 法然上人絵伝 上</p>	<p>13 松崎天神縁起</p>	<p>12 春日権現験記絵 下</p>	<p>11 春日権現験記絵 上</p>	<p>10 蒙古襲来絵詞</p>	<p>9 天狗草紙</p>	<p>8 一遍上人絵伝</p>
<p>続 1</p>	<p>続 22</p>	<p>続 14</p>	<p>続 13</p>	<p>13</p>	<p>続 26</p>	<p>20</p>
<p>一三〇七～一三二七</p>	<p>応長元年(一二二二) 閏六月</p>	<p>延慶二年(一三〇九)頃</p>	<p>延慶二年(一三〇九)頃</p>	<p>十三世紀最末</p>	<p>十三世紀末</p>	<p>正安元年(一二九九)</p>
<p>法然住房出文机 唐破風 日吉聖真寺末社 聖護院唐破風 内大臣家唐門 左大臣家唐門</p>	<p>蓮華王院門 宝殿鐘樓 松崎天神 二重門</p>	<p>興福寺鐘樓 熱田神宮樓門</p>	<p>春日大社宝殿 春日大社樓門</p>	<p>春日大社本殿 志賀海神社</p>	<p>比叡山西塔 清滝宮本殿</p>	<p>天神社 敵鳥拝殿 鎮守祠 吉備津神社本殿 石清水八幡宮 祠 天王寺伽藍 三鳥社</p>
<p>兎の毛通し 猪目 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし</p>	<p>猪目、猪目一つ 猪目、猪目なし(図が小さい)</p>	<p>猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ</p>	<p>猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ</p>	<p>猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目、猪目一つ</p>	<p>猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ</p>	<p>猪目、猪目一つ 猪目、猪目なし 猪目、猪目一つ 猪目、猪目一つ 猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目、猪目一つ</p>

寺院建築における懸魚の起源(佐々木 日嘉里)

20 大江山絵詞	19 弘法大師行状絵詞 下	18 弘法大師行状絵詞 上	17 石山寺縁起	16 法然上人絵伝 下	15 法然上人絵伝 中
続26	続11	続10	16	続3	続2
十四世紀	応安七年(一三七四) 康応元年(一三八九)	応安七年(一三七四) 康応元年(一三八九)	正中間 (一三二四～二六)	一三〇七～一三二七	一三〇七～一三二七
鬼屋敷 様門	内裏門 高野山伽藍山門、金堂 東寺真言院門 室生寺 東寺南大門 東寺八幡宮	比売社 高野山(坂葺き屋根) 観世音寺社 長安醴泉寺四足門 唐宮廷 青龍寺惠果住房 青龍寺食堂 青龍寺金堂 白邸平唐門	石山寺山門 (五卷 鎌倉) (一六卷 江戸補写)	石山寺山門 興福寺二重門、八脚門	出文机、唐破風 出文机、唐破風 出文机、唐破風
猪目、端正な外形、猪目なし	猪目、端正な外形、猪目なし 猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目、端正な外形、猪目一つ 猪目、猪目なし(図が小さい) 猪目、端正な外形、猪目なし	猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし 猪目、猪目なし	猪目、猪目なし	猪目、猪目なし 猪目、形状端正写真、猪目なし	兎の毛通し、猪目、猪目なし 兎の毛通し、猪目、形状端正写真、猪目なし 猪目なし 兎の毛通し、猪目、猪目なし

21	融通念仏縁起	統21	鎌倉末期十四世紀	住吉神社 鞍馬寺金堂脇末社	猪目 端正な外形、猪目上下2つ 猪目 端正な外形、猪目上下2つ
22	道成寺縁起	統24	十五世紀後半	道成寺二重門	猪目、猪目 ○穴一つ
23	桑実寺縁起	統24	天文元年(一五三三)	桑実寺本堂横堂宇 桑実寺鐘楼 桑実寺仁王門	猪目 端正な外形、猪目なし 猪目 端正な外形、猪目なし 猪目 端正な外形、猪目なし

四 奈良時代における懸魚

奈良時代における懸魚の形式を探る手掛かりは、これまでの時代より一層困難となる。資料の一つとして『和名類聚抄』を取り上げるが、これは平安時代に編纂された辞書の一種である。ただし懸魚の項目に奈良時代成立の『弁色立成』の引用文を載せ、その言辭を説明に代えているため奈良時代で用いられた懸魚の意味を知ることができる。そこには「懸魚俗云如字弁色立成云屋脊桁端懸板名也凡桁端有之」⁸¹⁾とあり、懸魚とは棟の桁端に掛けた板のこと、おおよそ桁の端にある、ということである。このことから、奈良時代の建物にも懸魚が使われていたことがわかる。

懸魚の形状に関して平安時代と同様に絵巻物を取り上げた。奈良時代最古で唯一の絵巻物『絵因果経』を手掛かりに調べてみたが、描かれた建物のほとんどが破風を持たない造り(寄棟造)のため不明である。破風のついた屋根も数棟あるが、そこには何も描かれておらず、懸魚の形状は不明である。

ただし『絵因果経』が初唐の画風で描かれていることから、初唐の中国建築に懸魚の形を知る手掛かりが期待でき、今後の課題となる。

五 飛鳥時代の懸魚

飛鳥時代の懸魚を知る手掛かりとして、まず世界最古の木造建築、とされる法隆寺西院の建築群が挙げられる。再建されたとはいえ飛鳥時代の建物である。当初の懸魚の存続を期待することは極めて厳しいが、何らかの手掛りを求めてみた。

法隆寺金堂の妻飾りには、唐草模様をした透彫の飾り金具が打ち付けられている⁸¹⁾。全体は猪目懸魚の外形に通じ、唐草は猪目模様原型と言える。また、縦長の形状は絵巻物で何度も目にした形状である。ただ、透彫の飾り金具では、風雨から木材を守るといふ懸魚本来の役割は果たされていないが、社会的地位を示す象徴の役割という点では十分果たされている。

これらの点から、法隆寺金堂の懸魚は飛鳥時代の懸魚の形式を示している、と考えることも可能である。そのためには懸魚の飾り金具が当初材であるか否かを確認しなくてはならない。

法隆寺金堂は、焼失後、飛鳥時代七世紀末に再建された建造物である。もし再建当初からこの飾りがあるならば、七世紀末の姿形である、と判断できる。しかし再建後何度も修理されており、特に豊臣秀頼による慶長修理（慶長五年～十一年・一六〇〇～一六〇六）の際に新たに懸魚を取りつけたことが墨書によって明らかとなった。その後も修理を繰り返し、昭和大修理の際、旧態の姿に戻すことが決定され、種々の研究、論争、試行錯誤を重ねた結果、現在の姿となったわけである⁸²⁾。昭和二十九年（一九五四）に金堂の修理が完成したが、報告書には修理前の金堂破風の写真が掲載され妻飾りの様子を窺うことができる。そこには慶長修理で取り付けられた猪目懸魚の上に透彫の飾り金具が付き、両脇の破風板に花形の飾り金具が付いている⁸³⁾。修理報告書では、これらの飾り金具は再建当初、すなわち飛鳥時代の懸魚とも見られる、との判断が下され当初材の懸魚として破風に掲げたのである。このことから飛鳥時代における懸魚の

一形態として唐草紋様が浮き出た縦長の飾り金具を捉えることができた³⁴⁾。ところでこの時代に板状の懸魚は使われなかったのであろうか。奈良時代に「懸魚とは棟の桁端に掛けた板のこと」と定義づけられていたことを考えると、飛鳥時代にも板状の懸魚が存在していた可能性は高い。

そこで、推定七世紀制作の中宮寺所蔵、天寿国曼荼羅繡帳に手掛りを求めた³⁵⁾。天寿国曼荼羅繡帳は刺繡された断片を交ぜ合わせて繋ぎ、額装に仕立てたものである。その凶案には入母屋造の屋根を持つ鐘楼が描かれ、破風には懸魚の形をしたものが刺繡されている。そのことから、飛鳥時代における板状の懸魚の存在が想定されたが、実は調査を進めるうちに、懸魚が刺繡された断片部分は飛鳥時代のものではないことが判明した。

刺繡された断片は全てが飛鳥時代のものではなく、鎌倉時代に復元された断片も交ざっていたのである³⁶⁾。刺繡や染色など各時代の技法の研究が進み、鐘楼の刺繡部分は鎌倉時代のものであることが確認された。ただ鎌倉時代の復元がどこまでオリジナルに近かったのか、という点についてはわかっていないため、懸魚の刺繡が飛鳥時代からあったのか、鎌倉時代に加えられたのかは判断できない、ということである。

以上飛鳥時代の懸魚について、現時点において、存在は確認できたが材質や形状に関しては未だ判然とはしない。今後の課題の一つである。

六 古墳時代の懸魚

飛鳥時代、仏教とともに朝鮮半島から導入された寺院建築であるが、懸魚も同時に導入されたのか、

あるいは日本に根付いていたものを用いるようになったのか。その判断にはさらに時代を遡り、古墳時代における懸魚の存在の有無を確認する必要がある。

古墳時代の懸魚を調べるには、出土品、例えば家形埴輪などが手掛かりとなる。三輪(1989)によれば、家形埴輪は四世紀ごろになって現れ始め、当時の木造建築物を写実的に表現していると報告し、さらに築造者の権威、身分を表現する手段として屋根を誇張し「かつおぎ」を載せる、などが行われていたと論じている⁸⁷⁾。また宮本(1995)は建築史家の立場から、家形埴輪において格式の高い建物ほど写実性に富むことを指摘している⁸⁸⁾。三輪・宮本(1989)が指摘したように、屋根の写実的な表現は被葬者の権威、身分の表現にもつながる。切妻造、入母屋造の家形埴輪の中には、妻側に棟木が突き出た表現が見られるが、これらは格式の高い建物を表していることになる。

格式や身分の高さを表現するのであれば、懸魚の存在もあり得る。しかし管見の限り破風部分に懸魚は存在していない。懸魚は本来棟木を守るために取り付けるものであるのに対し、家形埴輪の場合は、保護するよりもむしろ棟木を破風板の外に突き出し、その存在を知らしめている。破風の転び(傾き)が強いため、いつそう棟木は強い印象を与えている。

古墳の家形埴輪は、建築物を写実的に表現することで身分や格式の高さを表していた、という。棟木などが丁寧に再現された家形埴輪に懸魚がない、ということは当時の格式の高い建築物にも懸魚は飾られていなかった、と類推できる。

すなわち、古墳時代には、懸魚を用いることで棟木を保護し、格式を表現することはなく、懸魚の存在を認めることはできなかった。今後の発掘で発見される可能性は大いにあるが、現段階において、懸魚の存在はなかった、と結論づけることにする。

おわりに

以上、日本における懸魚の存在の有無を、時代を遡りながら調査した結果、「懸魚」は中国、朝鮮の影響によって飛鳥時代から定着した建築部材の一つであったことが確認できた。現存する確かな懸魚が鎌倉時代以前には存在しない中、文献や図像から痕跡を辿ることができた。懸魚は寺院建築に用いられる一要素に過ぎないが、その形状の変化からは、大陸との交流や技術革新などといった社会的な変化を視覚化できる興味深い部材であることが理解できた。

〔注釈〕

- (1) 梁思成著 『營造法式註釋』中國建築工業出版社 1983年 236頁 図157
- (2) 太田 (1951)
- (3) 「建長寺伽藍指図」建長寺藏 享保十七年(1732) 縦175.0cm×横83.5cm
- (4) 横山 (1967)
- (5) 巨福山建長寺、建長寺の歴史、 <https://www.kenchoji.com/about/#1>
- (6) 「賀茂御祖社遷宮用途注進状」には遷宮に際し、正殿に用いられた部材として覆輪付きの懸魚が記されている。「山城康徳氏所藏文書」仁治三年(一二四二)五月□日条(『鎌倉遺文』629)また、撰社の遷宮の際の文書に下魚(懸魚)が記されている。「山城座田文書」弘安七年(一二八四)十二月四日条(『鎌倉遺文』15573)また、阿蘇社造営に関する以下の史料にも懸魚が記されている。「肥後阿蘇文書」元徳二年(1330)正月十四日条(『鎌倉遺文』30870)、「肥後阿蘇文書」元徳三年(1331)四月三日条(『鎌倉遺文』31403)、「肥後阿蘇文書」正慶元年(1332)十一月二十二日条(『鎌倉遺文』31899)

- (7) 文化財建造物保存技術協会編『国宝永保寺開山堂及び観音堂保存修理工事報告書』(永保寺2012)において、開山堂は、年輪年代調査の結果一三三四年頃建立とされ、寺伝(一三三二年建立)より遡る可能性が示された。また観音堂の建立は、年輪年代法や放射性炭素年代測定を用いた結果、一四六〇年頃とされた。懸魚が建立当初、あるいは当初に近いものであることは、第四章第四項に判断の基準となった痕跡が記されている。
- (8) 天沼俊一『日本建築細部変遷小図録』星野書店 1944 頁450 図5
- (9) 杉野丞『観福寺本堂内宮殿について』『愛知県史研究』1巻 1997 116頁 写真・四
- (10) 東大寺堂宇で懸魚が用いられていたことが分かる文書として「東大寺検損色帳」長元八年十一月二日551、(東南院文書二ノ三、『平安遺文』)「東大寺綱封藏銀銅注文」永久五年七月二十三日4971、永久五年八月七日4970、(正倉院塵芥文書『平安遺文』)、東寺堂宇で懸魚が用いられていたことが分かる文書として「東寺損色検注帳」治承三年六月387(書陵部所藏壬生家古文書、『平安遺文』)が挙げられる
- (11) 「広隆寺文書」仁和三年(887)『平安遺文』175
- (12) 小松(1987) 小松(1991)
- (13) 小松1987年『信貴山縁起』「日本の絵巻4」40頁
- (14) 小松1987年『伴大納言絵詞』「日本の絵巻2」36頁
- (15) 小松1987年『年中行事絵巻』「日本の絵巻8」巻一 8頁 西中門懸魚
- (16) 小松1987年『伴大納言絵詞』「日本の絵巻2」24頁 懸魚部分を拡大(絵巻原本は出光美術館所蔵)
- (17) 小松1987年『伴大納言絵詞』「日本の絵巻2」24頁 公旨門(絵巻原本は出光美術館所蔵)
- (18) 小松(1987)
- (19) 徐光冀・古田真一(2012)

- (20) 小松 1991年『北野天神縁起(承久本)』「続日本の絵巻15」 13頁
- (21) 小松 1988年『東征伝絵巻』巻三「日本の絵巻15」 2頁、56頁
- (22) 小松 1991『春日権現記紀』上巻十 64頁、巻十一 73頁 下巻巻十八 31頁
- (23) 小松 1991年『北野天神縁起(承久本)』「続日本の絵巻15」13頁 懸魚部分を拡大(絵巻原本は北野天満宮蔵)
- (24) 小松 (1987) 小松 (1991)
- (25) 室町時代後期写し『義経奥州下り』国立国会図書館デジタルコレクションより、よりすぐり国立国会図書館 第一部 貴重書と古典籍、 <https://dl.ndl.go.jp/ja/best.html>
- (26) 奈良県教育委員会『国宝当麻寺本堂修理工事報告書 附图2』奈良県教育委員会事務局文化財保存課 1960 図面第八図
- (27) 小松 1991年『北野天神縁起(承久本)』「続日本の絵巻15」 31頁
- (28) 小松 1991年前掲書、31頁懸魚部分を拡大(絵巻原本は北野天満宮所蔵)
- (29) 小松 (1990)
- (30) 『和名類聚抄』巻十・居処部第十三・居宅具第137・10丁表1行目
- (31) 法隆寺国宝保存委員会編『國寶法隆寺金堂修理工事報告附圖』(国宝・重要文化財建造物修理工事報告書集成…戦前期; 補完5:5) 文生書院 2013 57頁 第60図
- (32) 青柳 (2007) では、法隆寺金堂・五重塔昭和修理の方針策定にあたり、基本方針が「創建時のデザイン再現」から「慶長期修理前」に復元へと修正されていた過程が示されている。そのため、懸魚を含めた破風のデザインも創建当初のものとは断定できないのが現状である
- (33) 法隆寺国宝保存委員会編『國寶法隆寺金堂修理工事報告附圖』(国宝・重要文化財建造物修理工事報告書集成…戦前期;

補充5：5) 文生書院 2013 242頁 第791図

(34) 法隆寺玉虫厨子は建築様式から見て飛鳥時代のもと考えられており、透彫りをはじめとする種々の装飾がなされている。しかし、破風には懸魚はなく、また痕跡もなかったことが、大野敏「飛鳥・奈良時代の厨子―厨子の建築的研究古代編―」『建築史学』第二十九号(一九九七年九月号)に記されている。

(35) 聖徳宗中宮寺。天寿国曼荼羅繡帳。聖徳宗中宮寺 公式ホームページ <http://www.chuguni.jp/>

(36) 飯田 (1965)

(37) 三輪・宮本 (1995)

(38) 三輪・宮本 (1995)

〔参考文献〕

太田博太郎「禪宗建築はいづ傳來したか」『日本建築學會論文集』42 一般社団法人日本建築学会 1951 128～139頁

横山秀哉『禪の建築』彰国社 1967

小松茂美 編集『日本の絵巻』中央公論社 1987

小松茂美 編集『吉備大臣入唐絵巻』『日本の絵巻③』中央公論社 1987

小松茂美 編集『弘法大師行状絵詞』『続日本の絵巻10・11』中央公論社 1990

小松茂美 編集『続日本の絵巻』中央公論社 1991

徐光冀(総監修) 古田真一(監修・訳)『中国出土壁画全集4』科学出版社東京 2012 180頁 171

青柳 晝昌「法隆寺金堂・五重塔昭和修理の方針策定過程に示された保存の概念」『日本建築学会計画系論文集』72 (613)

275-282 2007

飯田瑞穂「天寿国繡帳銘をめぐる」『古美術』三彩社(11) 39-49, 1965-11

三輪嘉六・宮本長二郎 編集『家形はにわ』No.348 「日本の美術5」東京 至文堂 1995

寺院建築における懸魚の起源(佐々木 日嘉里)